



Surrogate mother from garment factory in Bangalore, India.

バンガロールの裁縫工場出身の代理母たち

Interviewee

Dr. Sharmila Rudrappa

Q. 研究者としてのバックグラウンド、専門、関心領域を教えてください。

社会学者として訓練を受けた。オースティンのテキサス大学に勤務して、同大学の南アジア研究所の所長をしている。南アジア研究所は、米国政府からの助成を受けて運営されている。ウィスコンシン大学での研究を終えて卒業後、少ししてから、現在の大学にきた。それ以来、同じ大学に20年以上勤めている。

研究分野は、生殖の正義、出産の市場、バイオテクノロジーとバイオエシックス。フェミニストの視点からジェンダー、人種、移民という切り口で研究している。大学院生、学部学生の両方を教えている。

Q. 在外インド人として、インドでフィールドワークする際のメリット、デメリットを教えてください。

フィールドワークは、自分の出身のインド南部のバンガロールとその周辺で行なった。ローカル言語を話せることは非常に重要なことだと考えているので、インドのそれ以外の地域では調査を行わなかった。インド国外に住んでいる人間が

インドで調査をする方がうまくいくとわかったのは面白い発見だった。

インドでフィールドワークをするのに不利だったのは以下の点。

- ・ 時間的制約: 大学で教えているので、インドに行ってフィールドワークができるのは夏と冬の休暇の間のみだった。
- ・ 金銭的制約: 渡航するには研究費が必要だった。
- ・ 家族の世話との調整の難しさ: エスノグラファーとしてフィールドワークをきちんとするためにはまとまった時間が必要になる。まだ幼い子供がいるので調整が難しい。
- ・ 技術的制約: 自分の研究テーマでは、一般に、ZOOMやWhatsApp、インターネットなどを用いた調査ができないことがよくあった(※インド側の通信環境が良くない、インドのインフォーマントがそれらのテクノロジーにアクセスできないなど)。

インド以外の場所に住みながら調査をする利点は以下の点。

- ・ アカデミアの自由度が大きい: インドは右翼化してきていて、その状況を批判することは、たとえ外国からでも、雇用や調査継続が難しくなる可能性がある。インドのアカデミアには、恐れが存在する。だから米国に住んで米国の市民権を持つ自分は研究がしやすかった。
- ・ 昇進の可能性が高い: 政治的な観点から自分がインドで批判を受けた場合、昇進の可能性が制限されることもあっただろう。



外国人研究者がインドで調査をする場合、次のような困難に直面する。

- ・ 言語バリア
- ・ 人種差別: インド人は非常に人種差別的。特にアフリカ人、アフリカ系アメリカ人に対する差別がひどい。
- ・ 安全の問題: 地域によっては、女性は安全ではない。ジェンダー暴力がはびこっていて、恐ろしい(特にデリーとその周辺)。もし、文化的なサインを理解することができなければ、トラブルになる。そして、インドの色々な地域は、クイアの人にとって危険だ。
- ・ 犯罪の問題: パンデミック後、インドで多くの人たちが生きのびるのに必死になっている。外国人は窃盗の被害に遭いやすい。
- ・ ネットワークの欠如: 研究をするためにインドに行く場合、自分を守るためのネットワークが必要だが、それを作るのに時間がかかる。

Q. バンガロールでフィールドワークを行なったそうですが、代理出産についてどのような地域性がありますか?

インドでは場所によって、経済状況がかなり異なる。バンガロールの代理母は、ほとんど全員が裁縫の仕事をしている。彼女たちは裁縫工場を出て、代理母として生殖の流れ作業(reproductive assembly lines)に従事した。これに対してデリーには裁縫工場はなく、デリーの代理母は、家政婦として働いている女性たちや周辺の村からリクルートされてきた女性たちだった。代理母はネットワークを通して周辺の農業セクターからリクルートされたので、農業は崩壊した。

アナンドの代理母のプロフィールはよくわからない。自分が読んだ論文からは、彼女たちがどのようにリクルートされたか判読することはできなかった。この地域では、開発が進んでいて、昔から住んでいる地元の人たちは不安定な状態に置かれていた。

女性が代理母にリクルートされるプレッシャーは地域によって異なる。

チェンナイでは代理母をリクルートするのは非常に難しい。それはおそらくタミルナドゥ州では女性のための社会福祉のネットワークが発達していて、食料や教育プログラムが政府から提供されているから。

Q. フィールドワークで印象的だったことについて教えてください。

フィールドワークのために、あちこちへ移動したが、その際の運転手とのやりとりが印象的だった。

彼は Umesh さんといい、家族ぐるみでの付き合いだった。研究のため、初めて代理出産エージェントを訪問したとき、Umesh はたまたまそこで働いていた男性が彼と同じ村の出身であることを発見した。それが、研究のためのネットワークを広げるのに役に立った。その男性は、Umesh の村から、警備員として雇用されるために働いていた。自分は、なぜこの仕事でセキュリティが必要なのか、疑問に思った。

このビジネスを巡ってはたくさんの疑いを抱いた(例えばマネーロンダリングや不正など)。エージェントを運営していた男性は、いつも4、5人のセキュリティを引き連れていた。その様子を見て、水面



下ではたくさんの方が起こっているということがわかった。そのことにもものすごく関心を惹かれた。自分がインタビューをしている間、Umeshは現場で自分の耳として行動してくれた。彼のおかげで、このエージェントがどのようにコミュニティに入り込んでいるかを理解することができた。

それは、道徳的に曖昧なマーケットだった。それは、良いことなのか、悪いことなのか、それとも搾取的なのか、より大きな公共善につながるものなのか？

このマーケットに関する疑念は非常にたくさんあり、ありとあらゆる悪質な活動が生じている。例えば、代理母が約束された金額を支払われていない、または、代理出産エージェントが契約書のコピーを持っていて代理母の手元には全くない、など。今まで、署名済みの契約書のコピーを持っている代理母を見たことがない。これらはグレーな領域があることを示している。業界はほとんどの部分がアンダーグラウンドに沈んでいるが、完全にアンダーグラウンドかというところではない。だから、自分たちの活動を正当化するために相当な労力を割いている。

Q. インドの代理母たちは、情緒的な問題にどのように対処していましたか？

フィールドワークを通して、依頼者と代理母の両方と近い関係性を築いた。

母親と子供の関係に注目が集まりがちだが、多くの代理母が、他の代理母たちと近い関係を作り、その後も連絡を取り合っていた。彼女たちは、皆に会えるからという理由で、グループでのインタビューに喜んで参加してくれた。このよ

うなシスターフッドのような結びつきは彼女たちにとって非常に役立っていて、自分が研究を始める前は予想していなかったことだ。

もちろん、依頼者や子供と、連絡を取り続けたいと思う代理母もいた。ある代理母は、子供が一人しかいないのできょうだいがいなかった。だから代理出産で産んだ子供と交流できればためになると話していた。代理母たちは、それを自分にとっての喪失としてではなく、子供にとっての喪失だと語っていた。

もちろん、関係を継続することに対して単に興味がないとか、そのことに不安を感じている代理母もいた。依頼者は、代理母からお金を要求されるのを恐れているのではないかと心配する代理母もいた。彼女たちは、関係を終わらせるのが正しいことだと語っていた。

Q. インドは代理出産規制法を作ろうとしています。この法律に対するコメントは？

法案は再度改訂されて議会での審議を待っているところ。この法案は、多方面からの賛成を得ているが、内容は極めて反女性的なものだ。商業的代理出産を禁止し、利他的代理出産を容認している。しかし、利他主義は、女性の利益には滅多にならない。彼女たちはそういった利他を提供するような立場の人ではない。

法案では、遺伝的につながった子供について、今だに激しい議論がある。そして、代理出産は、子供がいない、あるいは障害がある子供しかいないヘテロセクシュアルのカップルだけに許されていることに対しても(もし健康な子供が一人でもいたら、代理出産はできない)。こうしたことは、非常にややこしい問題だ。



Q. 利他的代理出産の pro と con について教えてください。

インドの文脈での利他的代理出産の利点：インドには、流動的な親族ネットワークが存在する。改訂前の法案では、近親者(close relative)から代理母を探す必要があるとされた。しかし、“close”という言葉が明確に定義されていなかった。インドの親族ネットワークは非常に流動的で柔軟。だから実質的に血縁関係がない場合にまで拡大される。

インドの文脈での利他的代理出産の欠点：インド社会には階層的性格がある。例えば、貧しい親戚に代理母を依頼する可能性がある。貧しい親戚は、厄介な立場に置かれ、ノーというのが難しい。利他主義は搾取を取り除くのではなく、それをより深刻にする可能性がある。代理出産は無料で提供されるか、もしくは交渉事となる。(例えば、代理母になってくれたなら、あなたの子供の学費を支払うから・・・などと言って依頼する)。サービスに対する支払いは代理母に直接支払われることがなくなる。それは、どこか他のところに行ってしまう。だから、利他的代理出産を家族という概念にこだわって考えると、それはかなり問題含みのものになるだろう。

Q. 商業的代理出産の pro と con について教えてください。

商業的な取引の場合、法律家が関わって契約書を作ることで、関係者の責任や権利を明確に定義することができる。利他的代理出産でも同じようにすることはできる。しかし、商業的代理出産の方が、親近感がないので、潜在的な搾取の可能性はより低い。

商業的モデルでは、代理母の組合を結成するなどのように、集合的アクションが可能になる。インドのセックスワーカーと同じように組合を作って、声明を出すこともできる。

市場における様々な慣行の結果として、連合や組織が立ちあがるかもしれない。それは興味深い。利他的代理出産より商業的代理出産が優れているという意味ではないが、集合行動の結果として、シスターフッドが形成される可能性がある。

インドが代理出産を合法化する前に、綿密な検討が不可欠だと思う。

市場ネットワークは必ず出現する。インドが商業的代理出産を禁止したとき、それは搾取を減らさなかった。ビジネスは単に他の国やコンテキストに移行しただけ。その結果生じる活動はもっと悪いものになる。もし商業的代理出産が存在しなかった場合、こうしたプロセスは出現することはないから、これらの国際ネットワークも存在しなかったはず。箱の中に戻すことはできないから、代理出産を禁止することは地下に追いやるだけだ。

Q. カーストや宗教は、代理出産とどのように関係していますか？

利他的代理出産の場合、代理母は近親者に限られるので、宗教やカーストの問題は生じないだろう。

商業的代理出産のフィールドワークを行なっている最中、カーストの問題はそれほど重要には見えなかった。しかし、ほとんどの代理母が有力なカーストの出身だった。つまり彼らは政治的に強いカ



一ストだということ¹。代理母の多くが、裁縫工場で働いていた女性たちだったことを反映している。

あるドクターが言っていたことが面白かった。彼女のところにカトリックの信者の患者が来て、「この卵子はカトリックですか?」と聞いた。宗教は、代理出産よりも卵子や精子提供の場合に、より不安な要素となるようだ。対照的に、ヒンズー教の卵子ドナーとムスリムの代理母を使ったユダヤ人のカップルと話をしたことがある。彼らはそのことを得意げに話した。彼らは、子供が三つの宗教を体現するような形で生まれたことをとても祝福していた。

Q. インドの商業的代理出産において、賄賂はどのような役割を果たしていましたか?

米国では、代理出産の費用は、8万ドルから12万ドルくらいかかると言われている。しかし、依頼者がしばしばいうところによれば、実際の費用はもっと嵩む。最初の見積もりは正しくないからだ。だから最終的に費用は16万ドルから18万ドルくらいになる。

インドでは、固定料金(例えば、6万ドルが直接エージェントに支払われる)があるのが普通だったが、代理出産を成功させるために、2人の女性にそれぞれ4つの受精卵が移植されることがあった。これは代理母にとって恐ろしいことだ。代理母は流産したとしても対価を支払われるはずだったのに、エージェントはそのお金を自分の手元にキープし、代理母には支払いはないと告げた。そして、再度代

理出産のプロセスをやるように告げた。依頼者は、お金が代理母に行くと思って支払ったが、実際には流産から利益を得ていたのは代理出産エージェントだった。

Q. 代理出産規制法案に書かれている「母乳バンク」とはどのようなものでしょうか?

「母乳バンク」のことをあまり知らないが、面白い概念だと思う。母乳は非常に重要なもの。大きなフロンティアで様々な開発が可能かもしれない。それは新しい収入を生み出す可能性がある。女性の仕事に基づいているので、女性に利益をもたらす産業になるかもしれない。

インドの文化は母乳バンクを受け入れると思う。提供されたミルクを混ぜ合わせるプロセスがあるので、消費者がそれに問題を感じることはないと思う。今日、人工ミルクを与えない方がいいという考えが大きくなっている。そのため、エリートの人々は「自然」な母乳を我先にと購入する可能性がある。

Q. Fair trade model についてどのように評価しますか。

それがフェアであるかどうかだけではなく、誰がそれをコントロールするかということも大事。

出会った代理母のほとんどが、帝王切開を受けていた。労働組合モデルは、より生産的で、代理母をエンパワーする可能性がある。

¹ 被差別カーストであることを意味する。



依頼者の方は、インド人代理母を信用しておらず、労働者のコントロールを強化する必要があると考えている。だから、Fair-trade modelに労働者のエンパワーメントとコントロールの双方が組み込まれていれば、それは機能するだろう Fair-trade modelとは、お金や賃金のことだけであってはならない。

自分が出会った代理母たちは、だいたい4千ドルの支払いを受けていたが、それは数ヶ月ほどで消え、彼女たちはまた代理母になる。報酬を2倍にしても、同じことが起こるだろう。

Q. 外国人がインドで代理出産を依頼できなくなったことで、インドの体外受精クリニックの経営状態はどうになりましたか？(外国人が禁止された後、インドに行きました。外国人が来なくなってもインドの体外受精クリニックは財政的にそれほど困っていないという印象を受けましたが、それは正しいでしょうか？ 性別選択など別のサービスが新たな収入源になっている可能性がありますか?)

それは正確な評価だと思う。インドのグローバル代理出産は、外国人のクライアントと提携したエージェントによって提供されていたが、それらは10社以下だった。クリニックのサービスの大部分は国内市場に焦点を当てているが、国内と海外の双方の顧客を受けいれているクリニックでも、強力な国内基盤を持っていた。体外受精クリニックのサービスの多くはローカル向けだったので、外国人が禁止されても損失はたいしたことなかった。

インドでは性別の選択が禁止されているが、羊水を採取してタイに送り、その

結果を使用して赤ちゃんの性別を調べることができる」と聞いた。しかしこれは費用がかかるため、利用できるのはかなり裕福な人だけ。

小規模な代理出産ビジネスが行われている可能性がある。たとえば、ナイジェリアから女性がインドに連れてこられ、外国人依頼者の受精卵が移植される(たとえば、ゲイカップルの依頼者など)。妊娠24週間まではインドで監視され、その後ナイジェリアに送り返される。そこで出産し、依頼者が子供を迎えにくる。このような例では、インドの医師は、代理出産ではなく、不妊治療を提供しただけだと言っている。

いままグローバル市場とのつながりが深いインド人医師もいる。ナイナ・パテル医師の場合、最終的な目的は代理出産だけではなく、幹細胞研究だった。アナンドの彼女の病院を訪れたことがある。最上階が最先端の研究施設であり、中絶胚、臍帯血細胞、または代理出産に使用されず、研究のために寄付された受精卵を使って製薬産業に供されているのを見た。小規模な製薬会社と提携していた。それがパテル医師の、投機的資本主義(speculative capitalism)に基づく、最終目的だった。興味深いことに、パテル医師の病院への1,200万ドルの共同出資者は、自動車部品メーカーだった。

Q. その他、コメント。今進めているプロジェクト、今後やりたい研究など。

現在、2つのプロジェクトに関わっている。

1. テキサス州の田舎の病院の50%近くがCovid-19のために閉鎖され、財政的損失を被った。医療へのアクセス



を「民主化」するために遠隔医療へのシフトがあった。

2. オーストラリアの研究者と子宮移植について共同研究をしている。現在、インド、オーストラリア、米国の研究者が子宮移植について臨床試験を始めている。自分はインドと米国を担当している。インドでは、生体移植を行なっている。これは、腎臓移植の場合と同様に、アンダーグラウンドな市場が発展するリスクがあることについて、問題提起するものである。アメリカでは死体移植のみを行なっている。

(2021年12月)

Dr. Sharmila Rudrappa [Link](#)

テキサス大学オースティン校の社会学及びアジア研究の教授。研究関心は米国とインドにおける生殖市場。2つの著書で受賞歴がある。

著書:



Rudrappa S. 2015 *Discounted Life: The Price of Global Surrogacy in India*. New York, NY: New York University Press.
(Best Transnational/ Asia book, Asia/ Asian America Section, American Sociological Association, 2016. Co-winner)

論文:

Rudrappa S. 2018 Reproducing Dystopia: The Politics of Transnational Surrogacy in India, 2002-2015 *Critical Sociology* 44(7/8): 1087-1101

Rudrappa S. 2016 What to Expect When You're Expecting: The Affective Economies of Consuming Surrogacy in India. *Positions: Asia Critique* 24 (1):281-302

Rudrappa S., Collins C. 2015 Altruistic Agencies and Compassionate Consumers: Moral Framing of Transnational Surrogacy. *Gender & Society* 29 (6): 932-959.